

シンガポールと日本の本屋や図書館について

札幌市立札幌開成中等教育学校
村口 陽子

【はじめに】

・なぜこのテーマにしようと思ったのか

元々本や漫画が好きだったこともあり、外国と日本との書籍についての意識の差や本屋や図書館について比較することで今まで知らなかった特徴を理解することにつながると考えた。

・方法と方針

シンガポールと日本の図書館や本屋の比較から文化の違いなどを理解する。

そのために事前調査として本屋の数や設備などの比較をし、日本との違いなどについての予想を立てる。その予想をもとに調査をし、考察していく。

【事前調査（本屋・図書館について）】

基本情報

	シンガポール	日本
本屋の数	不明	11495店 (2022) ^[1]
図書館の数	27 ^[3]	3305 ^[2]
図書館の密度 (人口10万人当たり)	0.5個	2.3個 ^[4]
利用者(人口で一年間に図書館 を利用した割合%)	12% ^[6]	32% ^[5]
貸出数	デジタル1300万冊 計3860万冊	デジタル8万4千 計6億5千冊

貸し出しの仕組み

シンガポール：永住者は登録料 (S\$10.50) のみ

外国人は登録料 (S\$10.50) + 年会費 (S\$42.80) で基本会員
会員登録すると本を自由に借りることができる。

日本：利用者登録などでカードを作り本を借りることができる。

歴史

シンガポール：国立図書館庁 (NLB) は1995年に設立以来、Library 2000、Library 2010、Library 2020という政策に基き、図書館、公文書館の整備を進めてきた。

日本：日本は、奈良時代（8世紀末）に石上宅嗣が私邸内につくった書齋が
一般に公開された図書館の始まりと言われる。近代的公共図書館は、明治5

（1872）年に政府が設立した書籍館だったが、当時の図書館は、有料・閉架
閲覧制がほとんどであり、今のような無料貸出は、戦後に広まる^[7]

【事前調査（結果）】

シンガポールはデジタルでの読書などがより普及しており、図書館などの利用者が多く利用するための環境が整備されていると考えられる。また外国人との差や登録料が比較的高いことなどや急速に整備されているところなどからシンガポールらしさを感じた。こうしたことからシンガポール独自の本の文化などが整備されてきているといえる。

【シンガポールでの調査】

シンガポールでの調査では図書館、本屋を合わせて3か所しかまわることができず、バディなど自分に近い人達に意見が偏ってしまったため主観的な部分もあるがその上でシンガポールの事実の一面として調査したこと、その考察をまとめる。

調査すること

1. 本を普段どの程度読むか
2. デジタル、アナログどちらを主に利用しているか
3. 本屋
 - ・どのような言語の本があるのか/値段は日本と比べてどの程度なのか
 - ・構成、特徴的な違いはなにか
4. 図書館
 - ・どんな違いがあるか

調査結果

1. 2. バディ談

一週間に読む本は1~2冊

バディや周りの人は一週間で2冊程度本を読むことが多くデジタルとアナログは半々ぐらの割合で使い分けているといていた。デジタルには有名なアプリもあるそうだ。また本は高いとっていて、本を読む際は学校などの図書館で借りており買っていることはほとんどなく、本に対する金銭感覚の違いも印象的だった。

・生徒の中では漫画はデジタル、本はアナログなど分けている人も多いそうだ。感覚としては日本とほとんど変わらなさそうだった。シンガポールの学校では授業の合間にデジタルで漫画を読んでいる人も存在しその面でも違いを感じた。

3. 本屋について

オーチャードロードの紀伊國屋書店と高島屋で調査

多言語な本

ほとんどの本が英語、中国語が主流でマレー語などほかの公用語はなく紀伊国屋には奥のコーナーに日本語の本が少しあった。また、シンガポール独自の作家などはいなく、恩田陸や東野圭吾など日本のベストセラー作家の本も英語に訳されているなど世界の文学が集められているような感じだった。本屋の中の内容や本棚の構成などは日本と殆ど変わらなかったが、値段は2倍から3倍でかなり高めであった。

本の形状としてはカバーがないペーパーブックのものが多く、本を保存するものとしてではなく一時的に読むものとしているのかもしれない。漫画はほとんど日本の漫画が多くで最新刊まで入荷されているなど物流の面での特徴を知った。



4. 図書館

子ども用のスペースの整備

図書館はボランティアで読み聞かせなどもあるなど日本と全体的に似たような感じであったが、子供用のスペースが特に広く一階分整備されていると感じた。

【まとめ】

図書館や本屋は日本と大きくは変わらなかったが値段や言語などに文化的な違いを感じた。また、自国の作家ではなく世界中の文学が集まっているという点でもシンガポールの歴史やグローバルな在り方を感じることができた。

【おわりに】

ホストファミリーの中でも話す言語が違ったり、何ヶ国語もしゃべることができるなど言語に対する意識の違いに驚いた。こうした多民族国家的な特徴や勉強のありかたなどが図書館や本屋のあり方に大きく関係していると感じた。こうしたシンガポールでの文化体験をとおして、外国というものを理解を深めることや文化について知ることができとても良い体験となった。

【引用文献リスト】

- [1] 出版化学研究所 (n. d.). *日本の書店数*. Retrieved September, 13 2023, from <https://shuppankagaku.com/knowledge/bookstores/>
- [2] 日本図書館協会 (2022). *公共図書館集計*. Retrieved September, 13 2023, from https://www.jla.or.jp/Portals/0/data/iinkai/chosa/2022pub_shukei.pdf
- [3] NATIONAL LIBRARY (n. d.). *NLB Design Part 1_v2*. Retrieved September, 13 2023, from <https://www.nlb.gov.sg/main/-/media/NLBMedia/Documents/About-Us/Press-Room-Publication/Annual-Reports>
- [4] 文部科学省 (2019). *都道府県別図書館数*. Retrieved September, 13 2023, from <https://todo-ran.com/t/kiji/14230#:~:text=%E5%85%A8%E5%9B%BD%E3%81%AE%E5%9B%B3%E6%9B%B8>
- [5] カレントアウェアネス (n. d.). *動向レビュー*. Retrieved September, 13 2023, from <https://current.ndl.go.jp/wp-content/uploads/mig/ca/ca1499.pdf>
- [6] 中央調査報 (n. d.). *図書館に関する世論調査*. Retrieved September, 13 2023, from <https://current.ndl.go.jp/wp-content/uploads/mig/ca/ca1499.pdf>
- [7] 奈良県立図書情報館 (n. d.). *趣旨*. Retrieved September, 13 2023, from <https://current.ndl.go.jp/wp-content/uploads/mig/ca/ca1499.pdf>